**OG2 E3 HAR04 Part 4 8:32**

**Hachiman**

*…I know it’s probably a bad idea, but I can’t refuse. Besides, I’m too lazy to go home right away. I’ll wait for her as she asks.*

*⋯⋯碌なことではないと知りつつも、断ること自体はできていない. となると、そのまま帰るのも尻の据わりが悪く、結局言われた通りに大人しく待ってしまう律儀な俺⋯⋯*

**Haruno**

“Sorry I kept you waiting, my future brother-in-law!”

お待たせー、将来の義弟くん。

**Hachiman**

“...I’m not your brother-in-law.”

いや、義弟じゃないですから。

Ignoring my futile protests, Haruno made her way over and slipped into the seat opposite me. I followed each of her movements a little too closely, unable to help myself. I wasn’t really sure what else to think, other than ‘she’s beautiful’.

やって来た陽乃さんは、俺の抗議を聞き流すと、するっと俺の前の席におさまった。そのしなやかな動きを、つい目で追ってしまう。なんだかんだ言っても美しい人なのだ。

**Haruno**

“Huhhh, I suppose so.”

うーん。確かにそうかもね。

**Hachiman**

“Hmm? What is it?”

はい？ 何がですか？

**Haruno**

“*Brother in law* would be a waste, don’t you think?”

義弟じゃもったいないかなーって。

**Hachiman**

“That again? And here I was thinking you had something useful to say.”

またそういう適当なことを言ってるし⋯⋯それよりなんか話があったんじゃないんですか。

**Haruno**

“Hmm? Oh!”

ん？ ああ、それね

**Haruno**

“What path did you choose. Hikigaya?”

比企谷君の進路は？

**Hachiman**

“Well… I guess I’m going into the humanities.”

まぁ、文系ですかね。

**Haruno**

“I see, you’re always reading books after all. That’s a literary young man for sure.”

そっか、いつも本読んでるもんね。さすが文学青年。

**Hachiman**

“Oh, no, that’s… well…”

ああ、いや、それは⋯⋯まぁ。

It’s true that we met outside before whilst I was reading a book, but that was only because it was awkward.

確かに以前陽乃さんと街で会ったときに本を読んではいた。でも、あれは気まずかったからただ本を読んでいただけなんだよなぁ⋯⋯

It was my special book defence shield! Well, the reason was pretty uncool, so I tried my best not to look away. In response, Haruno leant forward across the table and peered at me with a devilish look upon her face.

ただの必殺本バリアなのだ。ちょっと理由がかっこ悪いので、自然と陽乃さんから目を逸らしてしまった。だが、陽乃さんは、少し前に屈んで俺の顔を覗き込む。

**Haruno**

“What kind of books do you read?”

どんなの読むの？

**Hachiman**

“...pretty much anything. Well, I don’t read that many foreign books...”

⋯⋯たいていなんでも. まぁ、海外のはそんな読まないですけど。

**Haruno**

“Hm. Akutagawa or Dazai, then?”

ふーん。じゃあ芥川とか太宰とか？

**Hachiman**

“Ah, I don’t really read either of them… I tend to go for more general fiction.”

読まなくはないですけど⋯⋯。普通に一般文芸のほうが多いですよ。

**Haruno**

“In that case, I’m not sure literature would work. You might enjoy something like sociology, don’t you think?”

じゃ、文学部はあんまり向いてないかもね。社学とかそっち系のほうが楽しいと思うよ。

I wasn’t sure what to make of that. Before I knew it she’d already began to give me advice.

言われて、ついぽかんと口を開けてしまった。どうやらいつの間にか相談に乗ってくれていたらしい。

I didn’t have any intention of doing what she says, so it wasn’t all that helpful, but still. I should be grateful for her kindness, at the least.

こちらにその気はなかったので、あまり釈然としないが、その厚意はありがたく受け取るべきだろう。

**Hachiman**

“...thanks.”

⋯⋯どうも。

**Haruno**

“No problem, Hikigaya.”

どういたしまして。

Haruno smiles and clears her throat.

陽乃さんは微笑むと、咳払いを一つする。

**Haruno**

“...so, have you heard anything about what Yukino is going to study?”

⋯⋯で、雪乃ちゃんは何学部志望とかって聞いてる？

**Hachiman**

*Dammit! This is the main subject… I lost the chance to thank her.*

*くっ、こっちが本題か！ 御礼言って損しちゃったぜ⋯⋯*

**Hachiman**

“No, nothing really. I guess she hasn’t decided yet.”

いや、文理選択がどっちかも聞いてないです。まだ決まってないんじゃないですかね。

**Haruno**

“Well then, why don’t you help her?”

それなら、お姉ちゃんに相談してくれればいいのになー。

**Hachiman**

“Sometimes, you want to figure things out for youself… I dunno.”

自分で決めたいってこともあるんじゃないですか。知らないですけど。

**Haruno**

“‘By yourself’, huh.”

雪乃ちゃんが。『自分で』ねー。

**Hachiman**

“Well, I think it’s something she has to decide *for* herself.”

そもそも自分で決めなきゃいけないことですし。

**Haruno**

“Well, if deciding ‘for yourself’ is even possible.”

ま、本当に『自分で』決められるならね。

**Hachiman**

*Didn’t she say that she went to a local University because her parents wanted her to…*

⋯⋯そういえばこの人、親の希望で地元の大学に進学したって言ってたっけ。

**Haruno**

“If she doesn’t make her own decision here, she’ll end up regretting it.”

ここ、ちゃんと自分自身で決めておかないと後悔するよ。

**Hachiman**

“Is that because you regret it yourself?”

それは、自分が後悔しているからですか？

**Haruno**

“You really do know everything, don’t you Hikigaya?”

比企谷くんは何でもわかっちゃうんだねぇ。

It’s almost like she’s ridiculing my shallowness. Yet, at the same time, there was a worrying sharpness to her voice that makes it difficult to disagree. The pressure oozing from the smile of Yukinoshita Haruno caused my hairs to stand on end.

その皮肉めいた言い方は俺の底の浅さを嘲笑するようだった。そして同時に他人が入ってくるのを拒絶する鋭さがある。笑顔の裏からにじみ出る圧力に思わず総毛立った。

**Hachiman**

“.………”

….……

Haruno lowered her eyes at me, her gaze all of a sudden much softer.

身構えた俺を見て、陽乃さんは目を細める。その視線はさっきまでと違い、柔らかい。

**Haruno**

“...just kidding. Don’t be so scared Hikigaya! It’s too cute.”

⋯⋯なーんてね。そんなに怖がらないでよ。可愛いなぁ。

**Hachiman**

*Uhm… can you stop digging around in my head?*

*あの⋯⋯そこで頭ぐりぐりすんのやめてくれませんかね⋯⋯*

**Haruno**

“But, you know… you’re the first one who’s ever said that to me.”

でも、そんな風に言ってきたの、君が初めてだよ。

---------------------------------------------------------------------------------

[name]比企谷八幡[line]（⋯⋯[ruby-base]碌[ruby-text-start]ろく[ruby-text-end]なことではないと知りつつも、断ること自体はできていない。となると、そのまま帰るのも尻の据わりが悪く、結局言われた通りに大人しく待ってしまう律儀な俺⋯⋯）[%p]

[name]雪ノ下陽乃[line]「お待たせー、将来の[ruby-base]義弟[ruby-text-start]おとうと[ruby-text-end]くん」[%p]

[name]比企谷八幡[line]「いや、[ruby-base]義弟[ruby-text-start]おとうと[ruby-text-end]じゃないですから」[%p]

やって来た陽乃さんは、俺の抗議を聞き流すと、するっと俺の前の席におさまった。そのしなやかな動きを、つい目で追ってしまう。なんだかんだ言っても美しい人なのだ。[%p]

[name]雪ノ下陽乃[line]「うーん。確かにそうかもね」[%p]

[name]比企谷八幡[line]「はい？ 何がですか？」[%p]

[name]雪ノ下陽乃[line]「[ruby-base]義弟[ruby-text-start]おとうと[ruby-text-end]じゃもったいないかなーって」[%p]

[name]比企谷八幡[line]「またそういう適当なことを言ってるし⋯⋯。それよりなんか話があったんじゃないんですか」[%p]

[name]雪ノ下陽乃[line]「ん？ ああ、それね」[%p]

[name]雪ノ下陽乃[line]「比企谷君の進路は？」[%p]

[name]比企谷八幡[line]「まぁ、文系ですかね」[%p]

[name]雪ノ下陽乃[line]「そっか、いつも本読んでるもんね。さすが文学青年」[%p]

[name]比企谷八幡[line]「ああ、いや、それは⋯⋯まぁ」[%p]

確かに以前陽乃さんと街で会ったときに本を読んではいた。でも、あれは気まずかったからただ本を読んでいただけなんだよなぁ⋯⋯。[%p]

ただの必殺本バリアなのだ。ちょっと理由がかっこ悪いので、自然と陽乃さんから目を逸らしてしまった。だが、陽乃さんは、少し前に屈んで俺の顔を覗き込む。[%p]

[name]雪ノ下陽乃[line]「どんなの読むの？」[%p]

[name]比企谷八幡[line]「⋯⋯たいていなんでも。まぁ、海外のはそんな読まないですけど」[%p]

[name]雪ノ下陽乃[line]「ふーん。じゃあ芥川とか太宰とか？」[%p]

[name]比企谷八幡[line]「読まなくはないですけど⋯⋯。普通に一般文芸のほうが多いですよ」[%p]

[name]雪ノ下陽乃[line]「じゃ、文学部はあんまり向いてないかもね。社学とかそっち系のほうが楽しいと思うよ」[%p]

言われて、ついぽかんと口を開けてしまった。どうやらいつの間にか相談に乗ってくれていたらしい。[%p]

こちらにその気はなかったので、あまり釈然としないが、その厚意はありがたく受け取るべきだろう。[%p]

[name]比企谷八幡[line]「⋯⋯どうも」[%p]

[name]雪ノ下陽乃[line]「どういたしまして」[%p]

陽乃さんは微笑むと、咳払いを一つする。[%p]

[name]雪ノ下陽乃[line]「⋯⋯で、雪乃ちゃんは何学部志望とかって聞いてる？」[%p]

[name]比企谷八幡[line]（くっ、こっちが本題か！ 御礼言って損しちゃったぜ⋯⋯）[%p]

[name]比企谷八幡[line]「いや、文理選択がどっちかも聞いてないです。まだ決まってないんじゃないですかね」[%p]

[name]雪ノ下陽乃[line]「それなら、お姉ちゃんに相談してくれればいいのになー」[%p]

[name]比企谷八幡[line]「自分で決めたいってこともあるんじゃないですか。知らないですけど」[%p]

[name]雪ノ下陽乃[line]「雪乃ちゃんが。『自分で』ねー」[%p]

[name]比企谷八幡[line]「そもそも自分で決めなきゃいけないことですし」[%p]

[name]雪ノ下陽乃[line]「ま、本当に『自分で』決められるならね」[%p]

[name]比企谷八幡[line]（⋯⋯そういえばこの人、親の希望で地元の大学に進学したって言ってたっけ）[%p]

[name]雪ノ下陽乃[line]「ここ、ちゃんと自分自身で決めておかないと後悔するよ」[%p]

[name]比企谷八幡[line]「それは、自分が後悔しているからですか？」[%p]

[name]雪ノ下陽乃[line]「比企谷くんは何でもわかっちゃうんだねぇ」[%p]

その皮肉めいた言い方は俺の底の浅さを嘲笑するようだった。そして同時に他人が入ってくるのを拒絶する鋭さがある。笑顔の裏からにじみ出る圧力に思わず総毛立った。[%p]

[name]比企谷八幡[line]「⋯⋯⋯」[%p]

身構えた俺を見て、陽乃さんは目を細める。その視線はさっきまでと違い、柔らかい。[%p]

[name]雪ノ下陽乃[line]「⋯⋯なーんてね。そんなに怖がらないでよ。可愛いなぁ」[%p]

[name]比企谷八幡[line]（あの⋯⋯そこで頭ぐりぐりすんのやめてくれませんかね⋯⋯）[%p]

[name]雪ノ下陽乃[line]「でも、そんな風に言ってきたの、君が初めてだよ」[%p]